『疑心暗鬼（アマチュア）』

プロとアマチュアの違いは、
自然を見方に付けたか、敵にまわしたか。

コリン・モリカワの全英制覇

日系人のコリン・モリカワが世界最古のメジャーである全英オープンを制覇した。マスターズや全米オープン、全米プロなどと比べて、全英オープンは、コースの難易度が高いのが特徴だといわれている。自然が作り出した微妙なラインのグリーン、予想もしない風や、急激な温度差、それに加えてスタート時間によってもコースのコンディションが変わるからだ。

今回の全英オープンは、イングランドにあるロイヤル・セントジョージズ・ゴルフクラブで開催された。テレビでご覧になった方もお分かりのとおり、なんといっても厳しいラフと、ほぼ直角に作られたようなバンカーが選手たちを苦しめた。最終日の展開は、3日目トップのルイ・ウーストハイゼン（南アフリカ）と1打差の2位でスタートした24歳のコリン・モリカワ（アメリカ）、ジョーダン・スピース（アメリカ）やジョン・ラーム（スペイン）など、誰が勝利するか分からないスリリングな展開となった。

コリン・モリカワは、既に、2020年の「全米プロゴルフ選手権」に続くメジャー2勝目。米ツアー通算、5勝目を飾ったことになる。大会トロフィーのクラレット・ジャグに"MORIKAWA"の文字が刻まれ、国籍はさておいて、いうなれば日本人がこの歴史ある全英オープンの初めての勝利者となった。

父が日系で、モリカワという名前のため、日本でもファンが急増している。デビューからまだ2年。昨年の全米プロ、そして今回の全英オープンもなんと初出場である。2つの異なるメジャー大会を初出場にして制覇したことになる。これは史上初である。

パワーゲーム全盛のツアーの中で、モリカワは誰よりも正確無比なアイアンショットでスコアをつくってきた。パーオン率2位。グリーンを狙うショット部門で1位。あえて言えば、唯一苦手なパッティングも今大会では抜群の数字を叩き出した。つまり彼の穴のない堅実なゴルフがこの偉業を生み出した。身長175㎝で、平均飛距離300ヤードに届かないモリカワは、ゴルフというスポーツの本質を我々に改めて教えてくれた。つまり「フェアウェイを歩く」ことを最優先するスポーツなのだ。東京オリンピックで、彼はアメリカ代表として、金メダルを狙う。7月29日、彼の肉体に流れる日本人の血がひょっとするとどんな大会よりも、自らの存在を証明する戦いになるだろう。中国人の母と、日系米国人の父を持つ彼は、残念ながら日本語は話せない。しかし、前回「ZOZOチャンピオンシップ」で来日した時に、「やっと私は家に帰ってきた」と嬉しそうに話したのが印象的だった。

戸張 捷 Sho Tobari

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業（現SRIスポーツ）に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデュース、コンサルティングなども手掛けている。